

広島芸術学会活動報告

二〇〇九年七月～二〇一〇年六月

米 門 公 子

▼平成二十一年七月三日（金）

会報第百三号を発行。巻頭に第二十三回総会・大会のスケジュールを掲載。続いて大会で研究発表を行うエリック・パイル、南出みゆき、加治屋健司が要旨を、関村誠がシンポジウムの趣旨、パネリストの青木孝夫、伊藤奈保子、菅村亨、鈴木榮子が発表要旨を寄せた。最終ページに第八十七回例会報告を米門公子が書いた。

▼平成二十一年七月二十五日（土）

第二十三回総会・大会を広島県立美術館講堂で開催。総会では平成二十年度の事業報告、決算報告、監査報告をそれぞれ担当委員が行い、そのまま承認された。引き続き、二十一年度事業計画、予算案が発表され、こちらもそのまま承認された。

大会に移行し、研究発表は①広島大学大学院生・エリック・パイルによる「ウィリアム・ブレイク『ヨブ記』挿絵における再構築された主題」②神戸大学大学院生・南出みゆきによる「中村不折がパ

リで見つめたもの」③広島市立大学・加治屋健司による「カラーフィールド絵画と大衆文化」。ミニ演奏会の後、シンポジウム「東アジアにおける芸術文化と生活」が始まり、青木孝夫、伊藤奈保子、菅村亨、鈴木榮子がパネリストを、関村誠が司会を務めた。

▼平成二十一年九月十九日（日）

会報第百四号を発行。巻頭に、伴谷晃二が「東アジアの現代音楽祭 2009 in ヒロシマ」の案内を書いた。続いて大会での研究発表①の報告を大山智徳、②を小西寛之が書いた。シンポジウムは大石和久がまとめた。最終ページに第八十八回例会案内を掲載した。

▼平成二十一年十月三日（土）・四日（日）

第八十八回例会は広島芸術学会と現代音楽プロジェクトの共同主催によるコンサートとシンポジウム「東アジアの現代音楽祭 2009 in ヒロシマ」。コンサートでは日本から三人、東アジアから九人の

作曲家の作品が総勢二十八人の演奏者(うち当学会会員五名)によって演奏された。シンポジウムは、世界的に著名な作曲家である湯浅譲二を招いて開催された。

▼平成二十一年十一月三十日(月)

会報第百五号を発行。巻頭言は馬場有里子の「東アジアの現代音楽祭 2009」に「ヒロシマを振り返る」。続いて魚住恵、関村誠、袁葉、柿木伸之が感想を寄せた。投稿欄に桑島秀樹が「パークの肖像(その2)―カトラス・チェアと刑罰法と従姉ナノ・ネーグル―」を書いた。最終ページに第八十九回例会案内を掲載した。

▼平成二十一年十二月十二日(土)

第八十九回例会を広島県立美術館講堂で開催。研究発表①は広島県立大学・李建志による「日本の『在日朝鮮人』表象―『抵抗のナシヨナリズム』では掬いきれないもの」②はふくやま美術館・谷藤史彦の「マッキアイオーリ後期における浮世絵版画の影響」

▼平成二十二年一月二十九日(金)

会報第百六号を発行。巻頭言は伊藤奈保子の「インドネシアの仏像との出会い」。第八十九回例会報告は、発表①を大山智徳、②を桑島秀樹が書いた。また、大会での南出みゆきの発表について末永航が報告した。その他、『藝術研究』への投稿について、二つのシ

ンポジウムの開催案内を掲載。最終ページに第九十回例会案内を載せた。

▼平成二十二年二月十三日(土)

第九十回例会を広島市まちづくり市民交流プラザで開催。研究発表①は広島大学大学院生・大島葉月の「近現代イギリスにおける景観美と都市構想」②は同大学院生・高村佳子の「静岡県平野美術館所蔵『二河白道図』について」。例会後、発表者を囲み懇親会を開いた。

▼平成二十二年四月二十日(火)

会報第百七号を発行。巻頭言は千代章一郎の「感性のこどもたち」。第九十回例会については、研究発表①を小野未千恵、②を菅村亨が報告した。最終ページに第九十一回例会案内を掲載した。

▼平成二十二年五月十五日(土)

第九十一回例会は野外例会。「新緑の備北路を行く」をテーマに円鏝勝三記念館↓上下の町並み↓あーとあい・きさ↓三良坂平和美術館を訪ねた。プラン作成および案内役は倉橋清方が務めた。

《平成二十二年六月三十日現在、法人会員二法人、個人会員二百五名(特別会員二名、一般会員百八十四名、学生会員十九名)》

(こめかど・きみこ 広島芸術学会事務局)